

1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

主の御腕は、だれに現われたのか。

2. 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

3. 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。

人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

釈義

「苦難のしもべ」の話は 52 章から始まる。

13. 見よ。わたしのしもべは栄える。

彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。

14. 多くの者があなたを見て驚いたように、

・ ・ その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。 ・ ・

15. そのように、彼は多くの国々を驚かす。

王たちは彼の前で口をつぐむ。

彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。

イスラエルのことを言っているのか？ ~ しかし、(14) イスラエルと主のしもべでは苦しみの原因と程度がまるで違う。

「そのように、彼は多くの国々を驚かす。」 = ここだけ ~ 「驚いた」(14) 「口をつぐむ」(15)の前後からの解釈

本来は「振りかける」~ いけにえの動物の血を振りかけることに (レビ 16:14,15,19)

故にここでは「主のしもべが国々から罪を清めるために血を注ぐ」と教えている。

この世の権力者、王たちも、

このような恐るべき苦難によって血を注ぐことで罪の贖いをするという

前代未聞の働きをした主のしもべの前に、畏敬の故に「口をつぐむ」しかない。

1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

主の御腕は、だれに現われたのか。

Wtē[mw]li !ymiah, ymi

!ma' Hiph. 1. stand firm : しっかり立つ. 2. trust, believe:

`htl'gal ymi l [; hwy> [ArzW

hl G uncover, remove (Qal 1. !Zohl G uncover, the ear of one, i.e. reveal to him; l. yWG disclosed, published. 2., intr. remove, depart. 3. go into exile.)

Niph. 1. refl. a. uncover oneself, (one's nakedness). b. discover or shew oneself, la, c. reveal himself, (of God), la,

2. pass. a. be uncovered (one's nakedness). b. be disclosed, discovered, foundations; gates of death. c. be revealed, with, l, the things revealed.

3. be removed. [Arz> n.f. and (rare) m. arm, shoulder, strength (In, abs. and cstr. sg. more oft. plene, in pl. and c. sf. more

oft. defect. In one, instance where Z is masculine it means a political or military force) -- ,

1. arm, a. lit., of a man; in fig. of Y teaching Ephr. to walk. b. arm as, seat of (human) strength. Esp.

c. Yahweh's arm as instrument of, deliverance and judgment. Hence,

2. *arm*, as symbol of *strength*: **a.**, human. **b.** = divine strength.

3. Pl. *forces*, political and military. 4. Shoulder of animal sacrificed, belonging to priest. (pg 283)

Who has believed our message

and to whom has the arm of the LORD been revealed?

「私たち」：イザヤ自身を含めたイスラエルの民を意識したもの。

「主のしもべが、国々から罪を清めるために血を注ぐ」という

恐るべき苦難によって人々と救うという前代未聞の話の一体「誰が信じてきたか」。

それは、「主の御腕」が発揮されるのでなければ、この驚くべき知らせを到底信じていくことが出来ない。

この前代未聞の救いの知らせは、同じく前代未聞の特別な方法で知らされることになる。

2. 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。

h'ci #ramevr, Vkw wpl. qn'k; l [y'w

land of drought

root

qny : young plant, sapling (*sucker*) in sim. of the suffering servant of 'Y. 「乳飲み子」

=desert

hl ['Qal Impf. go up, ascend, climb

from low place to high, of animals, go or come up

of vegetation, spring up, grow, shoot forth: trees; grass;

「苦難のしもべ」は「主の前に若枝のように芽生え」育つ(2) = 一生を主に守られ、主に従って過ごす
しかし、その環境は、水のない「砂漠の地から出る根のよう」であった。

イエスキリストが生まれ育った環境も、あらゆる意味で「砂漠の地」のようであった。

国際的環境：イスラエルはローマ帝国の植民地として、傀儡政権のエドム人ヘロデが支配する。

国民の宗教的環境：サドカイ人、パリサイ人といった神に逆らう宗教指導者たちに真理の光が抹殺される

イエスご自身の個人的環境：王家の子孫が、没落に没落を重ねて日銭を稼いで生活する大工・石工に。

つまり、せつかく「この方こそ自分の民をその罪から救って下さるお方」として生まれ育ったのに、

しかし、「砂漠の地」から生まれ育って、「見とれるような姿も、輝きも、私たちが慕う見ばえ」もない。

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

Wdxw harm'al {War' rdh' al { Al ra'at' {

n.m.

har'

ornament, splendour, honour

ra'

outline, form -- form, of woman; of cattle; tree.

sight, appearance

Qal Impf. 1.pl.

1. ornament. 2. splendour, majesty

ラケルは「姿も顔立ちも美しかった」「姿の美しい女性」

dmx'

3. honour, glory.

牛の「肉づきが良い」「ヨセフは体格も良く」

Qal 1.pl. desire, take pleasure in --

a. in bad sense of inordinate, ungoverned, selfish desire, sq. acc.; of lustful desire.

b. = take pleasure in, of idolatrous tendency.

c. less often in good sense, said of God; obj. the suffering servant of 'Y, no beauty in him,

that we, should desire him (choose him, be drawn toward him); pt. pass. coll. AdWdxu his desired things, i.e. chosen, choice, desirable

He grew up before him like a tender shoot,

and like a root out of dry ground.

He had no beauty or majesty to attract us to him,
nothing in his appearance that we should desire him.

「見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない」生涯 = キリストの、死を頂点とする生涯

3. 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。

人が顔をそむけるほどさげすまれ、
私たちも彼を尊ばなかった。

yl ko [Wyw tAbakm vyai ~vyai l dxw hzbnl

Qal.pass. b'akm l dx' hzB' Niph. Pt. despise, regard with contempt
n.m. pain 1. despised. 2. vile, worthless. 3. despicable, contemptible
肉体的、精神的な痛み、悲しみ 軽蔑された 恥ずべき 卑しむべき、見下げ果てた、卑劣な。

l dx' vb. Qal. cease 終わる、やめる、離れる、休む、差し控える、我慢する

2. of mental pain (of troubles of wicked), of Babylon;

(as result of sin; of Y's servant); in Y's, word to Baruch; partic. of suffering servant of Y.

yl k' n.m. sickness -- sickness, disease; of the suffering servant of Y; of rich man;

incurable disease; recover from sickness; metaph. of, distress of land; = wound, of violence in Jerusalem. (pg 318)

キリストが病身であったというのでなく、 罪の罰を痛みとして表現している。

肉体の病や痛みを癒す働きの中で、主がそれを負い、受けた。

主がこれほど我々のために苦しまれたにもかかわらず、

しかし、我々はその主の苦しみを意味を理解しないで、顔を背けるほどさげすんだ

hzbnl Wm' ~ynP' rTsmkW

hzB' Niph. Pt. rTsm' n.[m.] secret place, hiding-place --
despise, regard with contempt 1. secret place(s), concealed from view; where treasures are stored. (as a lion)
2. hiding - place(s): a. for protection. b. for perpetration of crime, esp. murder: sim. of lion; of Y lying in wait

Wnbv'x] al w

bv'x' Qal. pf. think, account -- Qal

I. of man:

1. think; sq. 2 acc.; elsewhere c. acc. + l; so, fig., of crocodile he reckoneth iron as straw. ,

2. devise, plan, mean, c. acc.; c. inf.; c. ytlbl + Impf.

3. count, reckon.

4. esteem, value, regard, silver, a man, the servant of Y.

5. invent, ingenious and artistic things; bv'xohf(m) work of the cunning (ingenious, inventive) workman; bv'x tbyx'm

inventions of inventive, men (of engines of war); bv'xwvr'x' craftsman and inventive workman.

II. of God:

1. think, c. acc. pers + l, indirect obj. account one, bywal, for an enemy.

2. *devise, plan, mean*, c. acc. + l indirect obj. **hbj l** *for good*; c. l pers. **yl i** *devise for me*; acc. rei + l [**;** *devise* ,
something against a person; towards one, c. l a *against*; sq. inf.

3. *count, reckon*, c. acc. rei + l pers., the habit of believing in **y he** ,
reckoned to Abram as righteousness (cf. **Niph. 3**); not *reckon iniquity to one*.

He was despised and rejected by men, a man of sorrows, and familiar with suffering.
Like one from whom men hide their faces he was despised,
and we esteemed him not.

説教

イザヤはおよそ紀元前八世紀に活躍した預言者です。

イザヤ書 53 章は、

彼がおよそ 700 年後に到来するメシヤの受難を予告した、いわゆる「苦難のしもべ」の預言です。

53 章の「苦難のしもべ」の預言は、実は 52 章 13 節から始まります。

「見よ。

わたしのしもべは栄える。

彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。」(13)

ここでは、まず、キリストが「栄え」、「高められ」、「上げられ」、「非常に高くなる」ことが宣言されます。

人類の救い主は当然のこと世界のあらゆる権威権力の上にそびえ立って世界に君臨するのです。

しかし、あろうとこか、次の節からは一転して苦難の描写がなされます。

「多くの者があなたを見て驚いたように、

~その顔だちはそこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。~

そのように、彼は多くの国々を驚かす。

王たちは彼の前で口をつぐむ。

彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。」(14-15)

「彼は多くの国々を驚かす」の

「驚かす」の意味は「振りかける」で、「いけにえの動物の血を振りかける」ことに使われます(レビ 16:14,15,19)。

つまり、ここでは、「主のしもべが国々から罪を清めるために血を注ぐ」と教えているのです。

そして、これを見たこの世の権力者、王たちは、

このような恐るべき苦難によって血を注ぐことで人々の罪の贖いをするという

前代未聞の働きをした主のしもべの前に、畏敬の念に打たれて「口をつぐむ」しかないと言います。

そうして、53 章に入ります。

イザヤはここでまず次のように語りかけます。

1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

主の御腕は、だれに現われたのか。

「主の御腕」は「主の手、肩、力」です。
その「主の力」が誰にあらわされたのかということですから、
要するに、「主のしもべが、国々から罪を清めるために血を注ぐ」という
恐るべき苦難によって人々を救うという前代未聞の話を一括誰が信じる事が出来るというのか、
主の力がその人に現れることがなければ、到底そう信じることはあり得ない、絶対にあり得ない、ということです。
未だ誰も聞いたことのない前代未聞の救いの知らせは、
世界に住むすべての人々が平等に悟り知ることができる話ではありません。
その知らせは人間の知性の限界をはるかに超えているのです。
ですから、どんなに研究しても、どんなに努力しても到底悟ることができません。

どのようにして救いの真理を悟ることが出来るのでしょうか。
それは「主の御腕がその人に現れる」ことによります。
「主の御腕、主の特別な力」がその人に臨まなければ、救いの真理を悟ることができなのです。
神さまに特別に選ばれた者だけが救いの真理を悟ることが出来ます。
キリストの十字架の福音は、
人の力と知恵によらず、神の選びにより、神の御霊によって、はじめて悟ることが出来るのです。

2. 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

「若枝」は「若枝、乳飲み子」の意味で、
「芽生え」はもともと「上る」の意味で、「芽生え育っていく」さまを意味します。
そして、「砂漠の地」は「渇いた地」の意味です。
つまり、水のない、生き物の育たない、死の世界の中から、
「苦難のしもべ」が生まれ、育ち、力強く成長していくさまを表現しています。
そして、そのことは、いのちの根源にいます「主の前に」あるということで実現します。

思えば、確かにイエスキリストが生まれ育った環境は、あらゆる意味で「砂漠の地」のようでありました。

国際的な環境を言えば、

イスラエルはローマ帝国の植民地として、傀儡政権のエドム人ヘロデが支配していました。

国内の霊的な状況を言えば、

パリサイ人、律法学者、サドカイ人といった宗教指導者たちが支配していて、

彼らは神に背いて真理を宣べ伝えたキリストを抹殺しました。

イエスご自身の個人的環境を言えば、

彼はダビデの王家の子孫として生まれましたが、

その王家たるやかつての栄光は消え失せて没落に没落を重ね、

イエスさまの頃には、その日暮らし、来る日も来る日も日銭を稼いで生活しなければならない

大工、石工をして生計を立てねばならないところにまで、惨めに落ちぶれてしまっておりました。

しかも、そこはガリラヤです。

日本で言うとそこは東北・北海道みたいな北の偏狭の地です。

しかも北王国イスラエルが滅びた時から近隣諸国の人々が雑居して来て、

次々に雑婚したので、もう何が何だかわからなくなってしまった「異邦人の地」です。
そこに住んでいる人々は、イザヤの表現を借りると、「闇の中で生活する人々」です。
「死んだも同然の人々」です。

「死の地と死の陰に座っていた人々」なのです。
そういう「砂漠の地」に救い主はお生まれになるとイザヤは預言しました。
どうしてでしょうか。

これもまた他の所に出て来るイザヤの表現を借りて言えば、「砂漠に水を湧き出させる」ためです。
「砂漠に水を出して、荒野を変えて果樹園となす」ためです。

でも、一体それはどのようにして実現されるというのでしょうか。
不毛の地に力強く伸び続ける「若枝」なるキリストは、
どのようにして死んだ世界にいのちの水を湧き出させるというのでしょうか。

この偉大な救い主の姿を、意外にもイザヤは次のように描写していきます。

2. 後半 **彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。**

「見とれるような姿」は
「体格の良さ、肉づきの良さ、美しい顔立ち」を意味し、
「輝き」は
「光暉、華麗さ、堂々とした威厳、栄誉、栄光」を意味します。
「私たちが慕うような見ばえ」とは、「自分がそうなりたいと節に願うような外見」を意味します。

つまり、イザヤが描く救い主の姿はそういうものがまるでないのです。
「体格の良さ、美しい顔立ち」とか、
「華麗さ、堂々とした威厳」とか、
「自分がそうなりたいと節に憧れるような外見」をまるで持ち合わせていないのです。

体格は良くないし、
顔も見栄えもしない、
堂々たる威厳もなく、
間違ってもそのようになりたいとは全然思わない、そういう人だと言うのです。

いや、それどころか、そうなりたいと思わないどころか、
さらに、もっとはっきり言って、絶対にそうはなりたくない人物として、イザヤはこう描写します。

3. **彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。
人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。**

「さげすまれる」は「見下される、軽蔑される、恥と見なされる」の意味です。
「のけ者にされ」とは「その人から避けて行く、離れて行く」という意味です。
「悲しみの人」は「痛みの人、悲しみの人」の意味で、

「病を知る」とは文字通りの意味では「病気の人」の意味です。

つまり、救い主は、

人々から「見下され、軽蔑され、恥と見なされ」、「痛み、悲しみの人」で「病を知り」、

どれほど人々から忌み嫌われるかと言えば、「人々からのけ者にされ、人々が離れて行き」、

さらにはあんな奴は忌まわしくて顔も見たくないと「彼から顔を背けるほど、とにかく徹底的に軽蔑される」と言います。

そして、3節の最後にイザヤはこう付け加えます。

私たちも彼を尊ばなかった。

イエスさまが人となられたのは、私たちのためなのです。

栄光を帯びておられなかったのも、それは私たちが天に迎え入れてくださるためです。

そのために、天の栄光を捨てて、この地上に、この荒野に、水のない砂漠に、私たちの所に来て下さったのです。

いつも悲しんで、痛んで、病気の人であったのも、私たちの罪の故の悲しみと痛みと病を背負うためです。

私たちの罪の悲しみと痛みと病を背負って生きておられたから、

イエスさまはいつも悲しんで、痛んで、病んでおられたのです。

そして、最後は十字架に架かって死んで下さいました。

それはすべて私たちのためです。

私たちの救いのためです。

私たちが罪と滅びから救い出すためなのです。

そして、この「苦難のしもべ」の姿を見て、世界中の君主は言葉を無くします。

権力争いに明け暮れる、血生臭い世の君主たちが、言葉を無くします。

驚きます。恐れを抱きます。

救い主の救いのみわざを見て、畏れるのです。

救い主が、ご自分のいのちを捨てて、私たちの罪を贖って下さったことに、言葉を無くすのです。

ユダヤ人はいけにえの儀式を知っていました。

血の注ぎも熟知していました。

でも、まさか救い主ご自身がそのいけにえとなって、

ご自身の血を注いで、それを振りかけることで、私たちの罪を贖って下さるとは、この時まで想像もしなかったでしょう。

52:15「まだ告げられなかったこと」「まだ聞いたこともないこと」と言われています。

これが救い主イエスキリストです。

この救いのみわざは人知をはるかに超えています。

これを知る者は特別に神さまに選ばれた者です。

1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

主の御腕は、だれに現われたのか。

いったい誰がこんな事を知りうるか、信じられるだろうか、信じられない、信じられないほどの恵みだ、

今はキリストの十字架は常識だが、少なくともこの時は誰も知らない、

救い主が来ることは知っていたが、まさかこんな形で来るとは、誰も予想しなかった、

それを、歴史上初めて、神さまはイザヤにメシヤの具体的な姿を啓示なさった、

そして、それを幻で知らされたイザヤは、「一体誰が、一体誰が」と驚きを隠せなかった、
救い主が、ご自分の受難を通して私たちに救って下さるという事実は、信じられないほどの事実なのです。

でも、これは事実ですから、まだ信じておられない方は、信じてキリストの救いにあずかってください。
そして、既に信じておられる兄弟姉妹は、その恵みに心から感謝して、神と人に仕えて生きていただきたいと祈ります。